

## 第7章 定年退職から最晩年：(1985～2009)

本章は、原口歌が65歳で国立音楽大学を定年退職した1985年から2009年8月に死去するまでの期間を対象とする。歌は1985年に国立音楽大学から名誉教授の称号を授与され、ほぼ30年に及ぶ教員生活を終えた。退職後は、国立音楽大学の門下生を中心に自宅でピアノの指導を続けながら、高齢によって病気がちとなっていく母の生活を支えた。実母の老年の姿は、同時に歌に自らの老いについての不安を与えることになった。以前から外出を嫌う歌は、大学を辞めてから自宅でひとり過ごす時間も増え、歌に一層の不安と孤独を感じさせた。

歌が退職した1985年当時、早稲田大学の後藤乾一教授は「原口竹次郎」について調査研究をしていた。後藤は、近代日本の南進をテーマとした研究を進めるなかで台湾総督府官僚時代の原口竹次郎に深く関心を持ち、竹次郎を南方調査の先駆者として注目し研究した。後藤は、同時に、原口竹次郎が早稲田大学の出身の大正デモクラットであり、彼の自由主義的思想と行動は早稲田大学の誇る歴史であるとして、その生涯の軌跡を検証し、記録に残す作業を進めていた。原口竹次郎の遺児である三女歌との出会いは、竹次郎に関する聞き取りや資料の提供を依頼したことからはじまり<sup>1</sup>、2年後の1987年に『原口竹次郎の生涯』を上梓した後も、竹次郎を敬愛する歌とは信頼関係を維持した。原口歌は、「人見知りが強かった」と、その性格について門下生たちが語るが、後藤の学者としての真摯な態度には当初から信頼を寄せ、研究の成就を強く望み、資料や情報の提供を惜しまなかった。後藤の来訪は、大学を辞した歌に、最愛の父竹次郎をよみがえらせ、改めて偉大な父を知る機会をえたこととなり、歌にとっては刺激的でまた幸福な時間でもあった。

後藤によってもたらされる、父に関するこれまで知らなかった情報は、改めて父との再会を意味した。しかし、その喜びも、母の死や歌自身の病気がちな生活を忘れさせるものではなかった。母の死後(1987年)、歌自身も重なる病気で気弱になっていた。歌の遺した書簡から判明したのは、音楽大学を離れて生活が大きく変化し、強い孤独と不安を抱える姿であり、その不安な思いをスイスの友人<sup>2</sup>に訴えていた。弱音を吐くことは、歌らしくない。しかし、外国人であり遠く離れた友とは、「距離」があるからこそ、悩む姿を語れることができた。スイス人の家族<sup>3</sup>とは、留学から帰国後も途絶えることなく交際が続いていた。初期の書簡では、クリスマス・カードや誕生カードの交換のみであるが、この時期になると、親密さがより濃厚になった様子がうかがえる。互いに年を取り、家族の成長を語る一方で「老い」の問題が取り上げられ、書簡の数も多くなっている。宗教についても、

<sup>1</sup> 後藤と原口歌との出会いは、1985年6月が最初である。

<sup>2</sup> スイス人 Weber 夫妻と Kobe 夫妻との文通。歌からの手紙にたいする返事の書簡が数多く残されている。さらに、アメリカ人日系2世でGHQに勤務した当時知り合った、Koshi 夫妻や遠藤夫妻との交流があったことが、残された書簡から判明した。季節的な便りだけでなく、この時代の歌にとっては、もっとも信頼できる友人であったようだ。

<sup>3</sup> 歌が留学時にホームステイした家族と思われるが、検証できなかった。

率直に語りあっていることが書面から読み取ることができた。母・志げをは、竹次郎との結婚の際にカトリックの洗礼を受け、生涯にわたり小石川教会の信者として務めを果たしている。しかし、歌はクリスチャンではなかった。音楽を通して、キリスト教への思いは強かったが、洗礼を受け、信者として信仰の生活をしたことはない<sup>4</sup>。宗教的・哲学的な思考をする歌ではあるが、キリスト教にこだわっていたとは思えない。その理由に、「仏教に惹かれる」と書いていた<sup>5</sup>。また、スイスの友人が、こころの問題を抱えて悩む歌に対し、愛情のこもった返事を返しているのが印象的である。退職後の生活をいかに過ごすべきかを具体的に助言もしているが、その率直でまじめな人柄が文面から伝わる。スイスからの手紙は晩年の歌にとって1つの支えであった。

「ピアノがすべて」といていた原口歌である。ピアノと音楽以外に特に趣味はなかったが、自宅で花の手入れをするのが楽しみだった。外出も好まず、旅行をすることもなかった。大学を辞めた後は、自宅の音楽教室でピアノの指導が生きがいとなる。指導を受けるのは、数名のかつての門下生に限られ、その数も次第に少なくなった。晩年の歌のもとを訪れるのは、2～3人の教え子だけであった<sup>6</sup>。その1人は、歌先生の身边を気遣い親身に世話をした。しかし、歌は彼女たちに「甘え」ようとしな。どこまでも、自身のスタイルを貫こうとした。カトリックでの葬儀を強く望んだのもその1つであり、定年の翌年に弁護士に遺言書の作成を依頼し、墓地（東京カテドラル教会の納骨堂）まで購入していることから明らかである。最晩年の歌の身近にいたのは、介護ヘルパー、看護師と、弁護士だけであった。自宅で過ごした晩年の歌の姿には、生涯独身を通し、音楽家・教育者として生きた女性の、孤独と不安が象徴的である。家庭を持たず、職業に捧げた歌の一生は、家庭に替るほどの濃密な親戚や友人とのネットワークを作ることなかった。彼女は、美しく教養ある自立した女性として、最後までそのスタイルにこだわった。

晩年の歌が、自身の生涯を振り返った時に最も大切であったのは父の記憶であった。早稲田大学が竹次郎にとって忘れがたい栄光と挫折の場所であるなら、父を顕彰し、記憶に留めてほしいと願うのは娘として自然な成り行きである。歌は、『原口竹次郎の生涯』を著した早稲田大学の後藤教授に遺言の形でその思いを託した。それは、原口家を記憶に留めてほしいと願ったからで、「家族」を持たなかった歌自身の生きた証としても記憶して欲しかった。89年の生涯は、大正・昭和・平成という日本社会の変化と不可分でもある。1女性が切り取る社会史でもあった。

---

<sup>4</sup> 歌は日曜日にも自宅の音楽教室で教え、「教会へ行ったことはないはず」「行く時間もなかった」と、国立音楽大学での教え子であり、原口歌音楽教室では最後の門下生として歌について最も身近な吉浦美知子が話す（2011年8月10日、インタビュー）。

<sup>5</sup> 成城小学校の記念文集の中で、65歳を過ぎた歌が投稿したものがあつた。その中で仏教への関心があると述べている。さらに、残されていた書物からも、仏教関連の書物が数冊の残っていて、特に永平寺に関する資料が多数ある。

<sup>6</sup> 晩年の歌を訪ねる門下生は、吉浦美知子、渡邊美和子、久保由美子の3名であつたと、同じ門下生の目黒順子が証言した（2011年10月28日、インタビュー）。

## 第1節 定年退職

### 1) 退職と生活の変化

原口歌は、1985年（昭和60年）年に国立音楽大学を定年退職する。退職時に他の2名の教授と名誉教授の称号を授与された。退職した歌は、以後、自宅の音楽教室での指導が生活の中心となる。自宅の別棟に住まっていた実母の志げをが、次第に高齢による病気から入院や介護を一層必要とするようになると、歌の関与は今までにもまして求められた。歌が大学を辞める数年前から、大学と病院を往復する歌の姿を教え子たちが記憶している。大学での勤務があり、さらに長時間の病院での付き添いをしなければならず、「疲れた」とこぼしたことを当時の歌を知る教え子は証言した<sup>7</sup>。退職前後の母の介護が、退官直後の歌に、自分自身の老いを考えさせる結果となった。教え子たちによると、当時、歌は母のために老人ホームを探し、また、実際に施設へ手紙を出してその様子を尋ねてみいる。パンフレットや、業者からの説明の手紙、かなりの数の関連した文書が残されていた。しかし、歌自身のこととなると、大勢で暮らす生活は苦手であり、1人でいたいとの思いから、「私はここ（自宅）で死ぬことに決めた」と教え子に語っていたようだ。歌には姉2人、妹<sup>8</sup>がいたが、彼女と交流のあった唯一の近親者は、姉・愛子の息子（歌にとっては甥）で、彼は幼い頃から歌を慕い、歌も一時は「養子に」と考える時期もあったと聞く<sup>9</sup>。しかし、この甥との関係もやがて切れる。歌は、姉妹をはじめとして、親戚や縁者からの手紙を一切残していない。親しい関係にあった人がある日突然断絶することは、歌をそばで見てきた人には珍しくはなかった。歌は、自分の感情を他人に知られることを嫌っていた。また、たとえ好意からでも、歌の内面にまで入ってくる他人を受け入れなかった<sup>10</sup>。

退職後の生活の変化は、歌自身の体調を崩し、それがまた老いへの不安を一層募らせた。歌の当時の心境を理解する手がかりとして、小学校の同窓会誌に次のように書いていた<sup>11</sup>ので、原文のまま引用する。

・・・「小学校を卒業してから52年余り」とあり、私は今更驚きました。人生を音楽一筋にあわただしく夢中で駆け抜けてきた私は、教えている生徒達が、小・中・高・大学と、皆若いので、自分も一緒になって若いという感覚があったと思います。でも新聞には「64歳の老婆、逃げ遅れて焼死」などと書かれて居り、私も立派な老婆になった、とがっくりきました・・・改めて、生と死について考えます・・・「人

<sup>7</sup> 大学時代の教え子であり、門下生であった吉浦美知子と目黒順子の証言。

<sup>8</sup> 長女早百合(1914年7月4日生)、次女愛子(1918年1月1日生)、妹で4女圭(1923年1月13日生)。いずれも歌と同じ、雙葉女学校で学んだ。姉の早百合と妹は長くアメリカで暮らした。(後藤より教示。) 現在はいずれも故人と聞いている(原田策司弁護士より)。

<sup>9</sup> 吉浦美知子の証言。渡邊美和子(旧姓盛本)も同様の証言をした(2011年10月29日)。

<sup>10</sup> 3名の門下生(吉浦、目黒、渡辺)とも同様の証言をした。

<sup>11</sup> 成城小学校、同窓会誌『三樹』第2号、1984年(昭和59)11月発行のものから引用。

は死ぬ、何故なら生まれてきたのだから」又、「ひとりで生まれてきたのだから、1人で死ななくてはならない」又、すべての出来事に対して、「前世の因縁」という。特に「御縁」という言葉が大好きで、すべてを表現していると思います・・・他からみれば、平凡な私の人生も、喜びも多かったけれど、多事多難、波瀾万丈でしたが、仏教に深い信仰が生まれました。すべてを自然にゆだねることだと思います。(以下、略)

歌の退職の1年前の文であるが、当時の彼女の心境がよく出ている。1つには、自分自身の意識はともかく、周囲からみれば「老人」であり、社会の第一線からは隠退する年になったと思い知らされる現実があること、次に、生活の変化から、内省的になり「生と死」について深く考えさせられる状況が生まれたことである。生と死の問題は、宗教の問題になる。歌自身はクリスチャンではなかったが、両親の影響や女学校での教育から、キリスト教への理解や親近感があった。しかし、晩年には仏教への帰依を意識するようになった。

定年直後の1985年から1987年頃の歌の様子は、スイスの友人からの手紙からも、歌の内面の変化を推察できた。スイスのチューリッヒ在住のKobe一家(MargritとWilli夫妻、その娘(?)でNew ZealandにいるUrsula)は、熱心なクリスチャンらしく、平和活動や市民運動などにも積極的な家族であることが書面から読み取れた。歌への手紙は、1985年頃から1987年にかけて集中している。当時の歌が内面の悩みを打ち明けたようで、Kobeがその返事をしたものである。ニュージーランドにいるUrsula(?)は、歌の友人として、次のような手紙を書いている。

Dear Utako,

It is again over half a year since I received your letter. Thank you so much for it. You tell me about your sorrows with your mother, and your friends, who were so ill, also of your own illness, and how you are going to retire in spring. (略)

I have no doubt that you will go on working and learning as long as you live, even if you are no longer a staff member of the conservatory. (略)

How is your mother in the meantime? Is she more or less happy in the hospital which you found for her? You say the places for old people are so sad and miserable in Japan.

That astonishes me, since I always thought Japan was so progressive in everything. (略) My mother has died around Christmas, after being very ill and helpless for many years. She was also completely confused in her mind. So death was really like a release from a humiliating prison for her, and I think we all felt rather thankful than sad.(以下略)

歌子さん

お手紙ありがとうございます、あれからもう半年以上過ぎてしまいました。お母様やご友人たちのご病気のこと、また、あなたご自身の病気、退職されたご様子など書いてくださいましたね。音楽大学をお辞めになっても、働いて学んでいかれることと思っていますよ。お母様のお加減はいかがですか。あなたが、お母様のためにお探しになった病院は、彼女にはどうだったのでしょうか。私は少しびっくりしたのですよ。日本はあらゆる点で進んでいる国だと、常々思っておりましたから。私の母も、長期の病の苦しみの末、クリスマスの頃に亡くなりました。彼女も心乱れた最後でした。ですから、死が「屈辱的な牢獄」から母を解放してくれたのだと、私たちは悲しみよりも感謝したものです。(筆者訳)

これは 1985 年 7 月 3 日にニュージーランド（オークランド）からの手紙である。この書面から、筆者は **Kobe** 夫妻の娘で、歌とはほぼ同年令の女性と思われる。彼女は 20 代の 3 人の子供を持つ母親でもあり、この時点ではニュージーランドに住んでいた。この手紙の後半は、子供たちの様子や、モーツアルトの映画（*Amadeus*）についての感想と日常生活が楽しく書かれている。

次に紹介するのは、**Kobe** 夫妻（**Willi** と **Margret**）の手紙からである。**Kobe** 家は歌がホームステイをした一家と推測する。長文の書簡は 1985 年以降のものが多く（それ以前はクリスマスカードや誕生カードのみ）、とくに 1987 年の 9 月から 12 月にかけて、はっきり **Kobe** からのものと分かるのは 5 通残っていて、その内容も親密なものであった。**Willi Kobe** からの 9 月 1 日付の手紙には、「あなたがお父様の回想録とピアノのレッスンで働き過ぎはしないかと心配です」<sup>12</sup> とあり、歌が過労ではないかと気遣っている。さらに、10 月には、「年を感じたり、孤独を思うのは、季節の所為ばかりではないですよ」<sup>13</sup>と書き、老いと孤独を感じるのは季節の所為だけではないといい、「歌さんが入院したことで、そのときの看護された経験があなたに老いや頼りなさを感じさせたのです」<sup>14</sup>、入院したことで、看護を受けたり、体力が衰えたりしていたこともあると慰めている。さらに、「老人ホームを探そうというあなたの考えには賛成です。1 人よりも仲間という方がいい。その意味でも老人ホームを購入するのは良い考えです」<sup>15</sup>と書いて、老人ホームを購入することも 1 つの解決であると支持した。「健康が許すなら、お年寄りや体の不自由な人々をあなたに出来ることで喜びを与えてください。それはあなたへ感謝として戻ってきます。あなたの置かれた状況を改善してくれますよ」<sup>16</sup>と、老人ホームで、歌自身に喜びを与えることができるはずとも進言し、積極的な生き方を助言した。信仰篤い人であるのは、以下の文章からも理解できた。

---

<sup>12</sup> 筆者訳。

<sup>13</sup> 同上。

<sup>14</sup> 同上。

<sup>15</sup> 同上。

<sup>16</sup> 同上。

To comprehend this reflection, be thankful and trustful to your god, which confided to your life. It is nothing as natural that we are growing elder from day by day and that therefore to become by the years lonely. But you are never alone, if you trust him and are taking daily thankful whatever he might send you with his "hands". This will bring you inner rest.

この様に振り返ることを、神に感謝し、神を信じなさい。神はあなたに与えてくださったのですから。私たちが日々、年老いていき、年々孤独になって行くのは、全く自然な事です。しかし、あなたは決して一人ではない。もし、神を信じ、感謝をささげるのであれば。神があなたに差し伸べる「手」がどのようなものであってもです。神を信じることで心の安らぎが訪れるのです。<sup>17</sup>

老いを不安に思う歌が、率直にスイスの友人に宛ててその思いを伝え、その返事の手紙である。老いへの不安を神を信じよと書き、歌への心配りがある。帰国した歌を、娘のように思って心配するのである。

次も 1987 年 10 月の Kobe からの手紙である。歌の仏教への帰依について、以下のように意見を述べている。

Also I thank you for your trusted information, that you found now in Buddhism your ease. This is not a wonder for me, because I know, that Japanese people are tending in their older years to Buddhism. I can understand this tendency. I also admire the quiet peace on the face of Gautama Buddha. Older people like this peace more and more during the growing years, remembering them on their last peace. The philosophy of Buddhism is a way to this peace, a philosophy out of which people made by the time a religion. But a real Christian belief along the teaching of Jesus also leads to this peace, which is coming out of the faith, that, if we are fading away of this life, we are remaining in the love of God. Peace in Buddhism is ending in the naught, only the popular Buddhism-religion is hoping of a better world, which is to find on the other side of a broad sea. I hope that you can stand to your conviction and ease till the end of your earthen days.

貴方が私を信頼して「今、仏教に安らぎを見出した」と告白してくれて、うれしく思います。あなたの仏を信じる気持ちは、わたしには驚きでもなんでもありません。

日本人が年を重ねるにつれて仏に帰依する傾向があるのは承知していますから。そ

---

<sup>17</sup> 筆者訳。

れに、ゴードマ・シュダルダの穏やかで平和な表情は私も称賛します。仏の平和なお顔に、お年寄りたちが好ましい感情をもち、最後の平安を願うのです。

仏教の哲学はこの平安に至る方法で、それが宗教となったのです。ですが、キリストの教えに従う真のクリスチャンもまた、こころの平安へ導かれるのですよ。それは信仰からのもので、この世での命がおわっても、神の愛に抱かれると信じているのです。仏教徒の平安は、無になることですね。仏教では大海の彼岸に善き世を予言するのです。私は、あなたがこの世で命ある限り、信ずるところに従って行動なさればよいと思います。<sup>18</sup>

歌が信仰について、Kobe にたずねたことへの返事である。彼は、仏教の教義への理解だけでなく、日本人の仏教信仰への理解も深く、スイス人としては例外的であろう。Kobe がどのようなバックグラウンドを持つ人物かは判明しないが、信仰に対する寛容な態度と聡明さが読み取れる。歌が、心の迷いを打ち明ける相手とし、その心境を手紙に書いたものと思われる。老いの問題が宗教の問題へと広がり、相互の信頼関係が若い時代に増して深まった。Kobe は、同年 12 月にも、「孤独」や「さびしさ」を「老い」にともなう「神からの贈り物」だという。心の奥深くへと思いを深めることの意味と、信仰の大切さを歌に書き送った。以下、Kobe からの手紙の一部である。

Growing older the far and outward things are shrinking and we have to be content with the works we are at time able to do. But we have also the privilege to grow deeper in connection with our spiritual life. The fate of this year is the fact, which we become more and more alone, losing our friends who are dying before us. But, if we have learned during our lifetime to trust our god, nevertheless we stay confident in the times which are given to us. We have so more and more to recognize our loneliness as a gift of the fading away of our years. I think that you will not be alone in your house. I suppose that your mother is still living in your neighborhood. Is she not sharing your loneliness?

年をとっていくと、外の世界が段々と小さくなり、自分に今、できることで満足しなければならなくなります。しかし、精神的なことに関しては、若い頃よりも深い理解ができるようになるという利点もあります。年をとるのは、確かに、だんだんと一人になっていくことです。身近な友人たちが一人、一人と先に逝ってしまうのですから。しかし、神を信じていれば、たとえそうであっても、与えられた時間を、自信をもって生きていけるのです。年ごとに強まる孤独を神様からの贈り物と思ひましょう。あなたは決して一人ではないのです。お母様のそばに居られるのでしょ

---

<sup>18</sup> 筆者訳。

う。お母様とその話をしてみたらいかがでしょうか。<sup>19</sup>

歌は、不安や淋しさを異国の友にだけは語ることができた、決して日本の友人には見せない側面である。彼女はこれらの手紙の内容そのものよりも、誠意のこもった返事を受け取ることをなによりも嬉しかった。信仰についても、仏教かキリスト教かという問題ではないことは明らかである。「老い」を受け止める時間をどのように過ごし、納得することができるかが課題であった。母の病と老いをめぐる思索が切実であったのである。

歌が残した書簡から、さらにスイスの友人だけでなくアメリカ人の友<sup>20</sup>にも、同様に老いや孤独について書いた。退職前後に歌が受け取った文面から、アメリカ人の友人宛の手紙<sup>21</sup>に、父のアメリカ時代の調査を兼ねてアメリカへ行く計画があることを告げ、退職して時間が出来たと書いた。続くアメリカの友人からの返事には、再会への期待と歓迎の気持ちにあふれ、彼の率直な人柄が読み取れる。結局、歌の病気や同年に多発した航空機の大事故によって「アメリカ行き」の計画は実現しないが、期待を持っていただけに、迎える側の落胆が伝わる手紙も残されていた。1987年11月の手紙には、老人ホームを探したという歌に、「偶然私も友人と日系人の経営する老人ホームの下見に行った」と書かれ、その偶然に夫人と苦笑したとも書いている。

お手紙を読んでちょっと苦笑しましたが、丁度偶然にもその日に友達と一緒に日系人の経営する「敬老」という老人ホームの下検分に行ったのでした。まだまだと信じながら、私たちの友達が段々と入って行くのを見ると、なんだか対岸の火とは思われなくなってきました。しかし、これも人生の約束の一つだと思えば、その日の来ることを予期して、できるだけ心がまえをしておいた方がやはり賢いやり方ではないでしょうか。

この友人とは年齢が近かったようであり、定年による生活の変化を書き送る歌への理解もある。また、彼自身も教会でオルガンを弾く奉仕活動に積極的である様子を書いた。

以上は、退職後の歌の心境について、遺品に残された書簡から読み取ったものである。歌が書いた書簡は残っていないので、一方的な理解と推測である。しかし歌は日本人には、決してこのように率直に心の問題を告げることはなかった。外国人であることで、お互い

---

<sup>19</sup> 筆者訳。

<sup>20</sup> GHQに勤務していた元アメリカ兵で、日系2世。夫人は日本人である。Koshi（合志と日本字を当てている）は日本語が堪能で、手紙も歌宛てにはすべて日本語で書いている。愛子夫人と歌も親しかったようであるが、直接の文通はない。占領期に日本に来た日系人兵士の1人であるが、帰国後は弁護士として成功した。Koshiは、一緒に日本に来た数名の元兵士たちへ、歌の訪米計画について伝えたようで、その興奮ぶりが書面から伝わってきた。

<sup>21</sup> Koshi夫妻からの手紙も、1985年から1987年に集中している。歌がこの頃、頻繁に外国の友に心境を書き送っていたと思われる。



の「距離」が却って歌に心を開かせたのも歌らしいと思う。

## 2) 音楽教室閉鎖へ

退職後の歌は、音楽教室での指導を続けた。その頃の様子を国立音楽大学の教え子の証言からまとめる。定年を迎えた歌は、門下生の1人に「あなたは大学院を出ていないから、これからレクチャーをしてあげる。ついては、勉強会をするのでこの名簿の人（20名ほど）に連絡して」と頼んだ<sup>22</sup>。この勉強会は20名ほどではじめられて、10年ほど続いた。その内の1人<sup>23</sup>で1987年から参加した方の話によると、「先生から、メシアンを弾いて」と言われ弾けなかったが、歌自身が弾いたと記憶していた。勉強会へ来たのは、「4～5名ぐらいではなかったか」と、証言に多少の違いがあったが、歌の指導の厳しさでは一致していて、①練習が大変であったことと、②個人レッスンであるからその費用が負担であったことの2点をあげていた。教え子といっても、それぞれが結婚し、家庭や子供を持つ年齢であるので、自分自身の「授業料」を捻出し、何年も続けるのは難しかった。他の先生のレッスンでは、レッスン後の「懇談」<sup>24</sup>が普通なのに、歌の教室ではレッスンだけで、生徒同士の交流も好まなかった。高いレッスン料<sup>25</sup>と事前に要求される厳しい練習で、ついて行けない卒業生が多かった。反面、歌が現役の時のように、あらゆる曲を弾けたこと、音楽大学の生徒に遜色なく難曲を演奏できたこの2点には尊敬した、と語った<sup>26</sup>。歌は、国立を辞めてからも、教え子たちに「真面目で、勉強熱心」な先生として記憶されている。

門下生の記憶によれば、1986年から1987年頃の歌は、「とにかく、落ち込んでいた」ようで、「元気がなく」「気分のむらがある」歌の様子を記憶していた。しかし、いつ訪ねても、歌の自宅は整然として塵一つなく、それは、先生の装いも同じであった。美しく完璧で、手抜きをしない。門下生たちも、「普段着の先生を見たことがない」と語った。

音楽教室の発表会は、退職後もミクロコスモスの名で続けられている。発表会は残されたプログラム<sup>27</sup>から、1990年（平成2年）、市ヶ谷の教会で「ピアノの夕べ」として開催さ

---

<sup>22</sup> 吉浦三知子より。

<sup>23</sup> 目黒順子より。

<sup>24</sup> レッスンで自宅を訪問するときに、生徒としては、「時々はお弁当持参だったり、レッスン後にお茶の時間があって、おしゃべりなど楽しい時間を期待するのが普通」であったが、そうしたことは一切しない先生であった、と渡邊と目黒が話した。また、吉浦も教え子たちが親しくすることをよしとしない先生であった、と当時のことを語る。

<sup>25</sup> 目黒によれば、自宅での個人レッスンに1回当たり2万円、これは「主婦」には負担である。経済的な理由も、勉強会のメンバーが減少していく理由であると話した。結局2～3回出席すると辞めていくメンバーが多かったようである。2台のピアノがあるから、と一度銀座のヤマハで練習所を借りたことがあり、その時は1回のレッスン料も破格で、これも教え子たちからは、常識はずれと映ったようだ。

<sup>26</sup> 目黒は、現在横浜でピアノ教室をひらいている現役の教師である。

<sup>27</sup> 1956年の最初の発表会のプログラムから、1990年最後の発表会まで、すべてのプログラムを保存していたことから、原口歌が個人レッスンにかけていた思いが理解できる。発表会の名称は、Spiegelbuilder, からミクロコスモスになっているが、欠年はなく、毎年開催

れたのが最後である。歌の身近にいた門下生数名は、この頃はレッスンだけでなく、日常の雑事で先生を助けていた。最後の発表会以降は、度重なる病気と不安から神経を病んだ歌を、積極的に世話をした。1999年の入院を最後に、歌は自宅の音楽教室を閉じた。

## 第2節

### 1) 後藤教授の来訪と早稲田大学

原口歌は、国立音楽大学を辞めて自宅でのピアノ指導の日々がはじまったその年に、早稲田大学社会科学研究所(現アジア太平洋研究センター・研究科)の後藤乾一教授と出会う。後藤は、歌の父の竹次郎について調査中であった。原口竹次郎は、第1章でも書いたように、草創期の早稲田大学が生んだ逸材であり、1905年(明治38年)早稲田大学となった同校第1回卒業生総代を務め、さらに大山郁夫や北原淑夫とともに、第1回特待研究生に選ばれた人物である。後藤は、東南アジア史の専門家として研究の途上で偶然にも原口竹次郎の名を知るところとなり、以後、彼の生涯を調査、記述したいとの思いであった。歌の手元に残されていた後藤からの書簡は、はっきり判別できるものだけで約42通あるが、その多くは1985年から1987年に集中し、大部分が父竹次郎に関する情報交換と資料提供への礼状であった。歌は後藤が発見し、整理した新しい資料に接して、父竹次郎へ敬愛を強めた。以下は、1985年(昭和60年)6月16日付の後藤教授から原口歌へ最初の手紙<sup>28</sup>である。

原口歌様

梅雨の不順な候、御健勝にてお過ごしのことと存じます。唐突にお手紙を差し上げ恐縮に存じますが、私は、原口竹次郎先生の事跡を調べております早大の後藤(専攻、東南アジア史)と申します。先日、倉西早百合様にお目にかかる機会を得ましたが、その後、夫人からお電話を頂き、是非原口様にお話をうかがうようにとのごことでございました。私の主たる関心は「南方調査」の組織者としての原口先生のお仕事にあります。早大の大先輩でもあられる先生の全生涯を一度きちんと整理しておかねばとかねがね思っておりました。何かとお忙しい最中とは存じますが、一度お話をうかがう機会を作っていただければ幸甚と存じます。改めてお電話でご挨拶致しますが、どうぞその節は宜しくお願い申し上げます。

後藤は、竹次郎についての調査研究をまとめて2年後の1987年『原口竹次郎の生涯：南方調査の先駆』として上梓した。原口歌は、初対面の時から後藤の研究者としての熱意に好感をもち、父の生涯を改めて知る良い機会との思いもあった。台湾生まれで、官僚の娘

---

された。

<sup>28</sup>原口歌が保管し、遺品として残していた後藤教授のから書簡は、43通余りある。また後藤教授から、拝借し、コピーをさせて頂いた歌から後藤教授へ宛てた書簡も7通ある。

として幼い時代を過ごした歌は、竹次郎の早稲田大学時代を知らない。歌にとっても父の生涯を辿ることは、名誉でもあり、興味を持った。教え子たちにその頃の高揚した気分を吐露している<sup>29</sup>。

1985年6月の最初の手紙以後の書簡を一覧表に整理した。結果は、後藤によって行われた「学術的フィールド・ワークの詳細」である。また、同時に研究者としての姿勢、対象である竹次郎への熱い思い、縁者である歌への人間的な信頼関係の構築が読み取れる。これは、筆者ばかりでなく、研究を志す者へ大きな指針となると確信する。

表1. 後藤から原口歌への書簡内容要旨（筆者まとめ）

年	月日	内容
1985	6.16	最初の手紙、自己紹介。
	6.26	訪問したことへの礼状。
	7.4	資料提供のお礼。
	7.19	竹次郎の兄の子（昇・死亡）のその嫁（直子）より連絡があった。 佐賀へ行き、竹次郎の出身校を調査する予定。
	8.21	佐賀へ。竹次郎の早大入学以前の経歴について、出身校に照会。 本郷弓町教会で、竹次郎の受洗の事実はない。志げをは受洗している。
	9.5	写真の返却。オーストラリア国立公文書館から竹次郎の動静について文書が見つかったと連絡を受けた。
	9.30	訪問のお礼。「米国便り」と「ライプニッツ大学より」のコピーを送付。
	10.11	弁護士の件。
	10.24	増田与教授の紹介で原田策司弁護士を紹介。早大社研の案内。
	11.5	早大社研への寄付、インドネシア研究に充てたい。
	11.13	ハートフォード神学校の住所を連絡。『社研45年の歩み』学内展示。
	12.24	『早稲田フォーラム』（1月末刊行）に「早大時代の原口竹次郎」として小論をまとめた。
	12.27	「寄付申込書」を受け取った。その礼状。竹次郎直筆の履歴書が見つかった。涵養小学校（現、西有田町立大山小学校）、私立東京中学校（現、東京高校）と判明。関係資料を持参する。

<sup>29</sup> 吉浦によると、歌が「早稲田大学の若いエネルギッシュな教授が父のことを書いてくれるの」といったことを覚えている。「御本ができあがったら、皆さんに差し上げたい、是非読んでね」と嬉しそうであった、とその頃の歌の様子を話した。また、外国の友人たちへも「父の本」ができることを書き送ったことが、残されていた往信から判明した。

1986	1.13	社研への 100 万円の指定寄付。総長室資金課より振り込み先を事務連絡。
	1.30	ハートフォード神学校から連絡があったが、「現地調査」の必要を痛感する。歌のアメリカ訪問に期待する。 国立国会図書館で『現代の亜米利加』を入手。『戦争乎平和乎』と合わせ 2 冊の著書を出し、翌年早稲田を去った。竹次郎の輝かしい時代。
	3.26	神学校からの資料のコピーを頂いたお礼。ハートフォード神学校から後藤宛の返信コピーを送る。現地調査の必要を痛感。「寄付」の記述があるので『広報』を送る。
	5.14	ドイツから鶴子夫人に宛てた葉書 2 通、新井（高村）しげ子宛て一通が見つかった <sup>30</sup> 。
	5.24	ライプニッツ大学について。竹次郎のドイツ留学先。
	6.6	資料提供のお礼。隣家の三井家。
	9.9	インドネシアと台湾へ行ったこと。台湾のすばらしさ。
	9.13	訪問のお礼。台湾関連の写真を拝見。貴重な資料に出会えた。
	11.12	社研の「展示会」案内。『早稲田学術文化人物事典』刊行予定(結局未刊)。その中で、「原口論」を執筆する予定。
	12.29	原田策司弁護士からの「公正証書」コピーが届いた。『祖国』(元、早大教授で「早大事件」で辞職、後政治家となった北吟吉が主宰した雑誌)に、竹次郎のものと思われる論文を発見。国会図書館で閲覧できる。竹次郎に関する資料がかなりそろってきた。 「歌先生とお話をしていると、竹次郎と話しているようだ」とも。「本ができて上がった時は、是非読んでもらいたい」。
1987	1.22	カードに添えて。塩谷巖三 <sup>31</sup> の留学日記、出版が決まった。
	1.28	25 日付の手紙を嬉しく拝読。竹次郎の本が見つかった偶然。『現代の亜米利加』大正 5 年 (1916) 富山書房。入手でき次第、コピーを送る。
	2.3	塩谷巖三の留学日記、出版社が龍溪書舎と決まった。
	2.13	竹次郎の命日 (16 日)。墓参。
	2.17	電話のお礼。雑司ヶ谷は竹次郎ゆかりの地。是非墓参に。
	4.1	訪問したお礼。『竹次郎伝』の進捗状況。

<sup>30</sup> 早大演博の荻野いずみ氏から提供。しげ子は鶴子の妹である (筆者注)。

<sup>31</sup> 原口竹次郎の台湾総督府勤務時代の部下で、竹次郎がバタビア法科大学への留学を支援した人 (塩谷巖三(後藤乾一編)『わが青春のバタヴィア』龍溪書舎、1987 年、参照)。

	5.18	日蘭学会事務局。
	5.30	オランダのヨンゲヤンス夫人の手紙、礼状。 原稿を清書中。出版社を探している。本の中で、ヨンゲヤンス氏に言及するつもり。
	6.25	ジャカルタへ、インドネシア各地を訪問する予定。峰島先生、増田先生もお待ちしているので、是非、大学をお訪ねください。竹次郎の原著はお手元に。
	9.25	日蘭学会は竹次郎ゆかりのオランダ文化センター。事務局長を紹介したい、夫人はインドネシア人。 『社研ニュース』同封。「昭和 62 年度社研デー」で「原口竹次郎資料展示」が決まった。
	10.8	台湾総督府調査課塩谷巖三著『わが青春のバタヴィア』（日記）を送る。（その本で、竹次郎に触れている箇所を列記し、同封）。
	11.6	日本経済新聞「文化」欄（「今に伝える南方青春譚」―昭和初期のインドネシア、調査マンの日記出版。後藤乾一）の切り取りコピーを送付。13 日の訪問（大学）を楽しみにしている。
	11.14	展示会で使用した資料返却。
	12.20	自宅を訪問したお礼。竹次郎の新資料発見できたこと、充実した研究ができたこと手応えがある。歌先生の協力の賜物。
1988	2.29	社研訪中学術親善団で北京・西安・天津を回る。
	7.29	タイへ学生と共に行く。
1992	12.13	進物へのお礼。

手紙はいずれも、歌への気づかいが感じられるものであった。後藤を通じて情報交換したことは、改めて早稲田大学と父竹次郎の濃密な関係を再確認したと同時に、父を偲ぶことが喜びであり、退職直後の不安定な時期にあった歌に、自信を与えることとなった。後藤への信頼は、早稲田大学社会科学研究所への寄付を決めたことに現れている。歌は、病気がちで弱気であった時期であるが、できるだけの協力をしている。後藤の来訪の前に、自身でもアメリカ行きを計画していたようで、友人からの手紙からその事実が判明した。後藤との出会いは、改めてアメリカ旅行を実現させたいと願ったはずである。竹次郎が留学時代を過ごしたアメリカに行き、直接現地を知ろうとしている。頻繁にアメリカの知人や友人に連絡を取り、その計画を知った友人からの手紙が数通残されていた。歌は、甥にもその計画を話している<sup>32</sup>。これらのことから、この時期の歌は、真剣にアメリカ行きを考え

<sup>32</sup> 甥の金平茂夫は、歌に頼まれてアメリカにいる友人にハートフォード神学校についての調査を依頼したことがある。その友人からの返信が残っていたことで判明した。歌は小さい頃からこの甥をよく知り、一時は養子にと考えていたこともあったようである。この頃

ていたと思われる。しかし、1985 年夏に計画を中止した。アメリカ人の友人である Koshi<sup>33</sup> は、歌に次のような手紙（1985 年 10 月 2 日）を書いている。

原口さん

（略）9 月も早や過ぎ去ってしまい、なんとなくあつけなく思っています。今年又、お目にかかる事ができると嬉しく思っていました、実現できず大変残念に思っています。しかしこんな頻繁な飛行機事故<sup>34</sup>が続発しては、無理もないことです・・・もう少し安心して旅行ができるようになったら是非来てください・・・ジョイスも是非原口さんに来てもらいたいと言っていました。（略）

翌年 1986 年 5 月に再び歌がアメリカ行きを考えたようで、Koshi は、次のように書いている。

5 月 1 日のお手紙を昨日受け取りました。文面の Good news を読んで、私達は一斉に歓声をあげました。こちらにおいでになるとのこと、本当に嬉しく思いました。そちらの都合で何時お出でになってもよいと思いますが・・・もしできれば今度はゆっくりして頂いて、方々ご案内したいと思います。もう既に、適当な歴史的、旧跡、名所を物色して居ります。ついでにサンフランシスコ地方のロイ<sup>35</sup>のところ、又、ロスアンゼルスของメリーさんの所にもちょっとサイド旅行されるのも面白いでしょう。早速お互いの都合を打ち合わせてみましょう・・・（略）  
既に退職の手続きも無事にすまされて、自由の身になられたとのこと、どうかゆっくりと心身共に解放された気持ちでゆっくりと来てください。 Koshi 一家より

Koshi は、「いつ頃、お出でになる計画ですか？アメリカ旅行は思われるほど心配されることはないとも思います。原口さんの英語は普通の会話には充分だと思います。それに Hartford には日本からの留学生も何人が居ると思います・・・」と書き送った。  
だが結局、歌のアメリカへの旅行は実現せずに終わった。Koshi は、歌の友人として、また竹次郎を知る者として、竹次郎のアメリカ留学の情報収集について、とくに神学校に関し

---

までは、甥と歌の関係も良かった。彼も叔母の家の雑事を手伝い、病気の際には何かと世話をしたことが周囲からの聞き取りでも証明できる。しかし、最晩年になると、歌はこの甥との関係を絶った。好き嫌いが激しく、人間関係を紡ぐことが苦手だったという証言(前田千恵子、麻布教会信者で、カリタスの家ボランティア、歌が受洗の際の太母を務めた)もある。

<sup>33</sup> ジョージ・合志 (Koshi)。シアトル在住。夫人は愛子。元アメリカ兵で、GHQ の一員として来日したときから歌との親交がある。

<sup>34</sup> 1985 年 8 月に JAL 機が御巣鷹山に激突した航空機事故をおこした。

<sup>35</sup> ロイ・遠藤氏。Koshi と同様に GHQ の元兵士として来日し、歌と親しくしていた日系二世のアメリカ人である。彼からの手紙も 4 通残っている。

て非常に熱心で協力的であった。歌に代わって、ハートフォード神学校へ出向いており、歌の竹次郎への思いを受け止めていた友人の一人であった。さらに、Koshi は、同年（1986）3 月 10 日の手紙で、妻の愛子とともに日本を訪れることを次のように伝えてきた。

4 月 29 日シアトル出発、翌 30 日成田着は確定したようです。航空会社や Northwest ですが正確な時間と Flight NO.はその内に御知らせするとのことです・・・東京滞在中はホテルの予約は原口さんのいわれる通り英皇太子夫妻の訪日、それとレーガン大統領の訪日などで大変混雑して見込みない・・・この際「原口ホテル」に厄介になりたいと思いますが如何でしょうか・・・東京滞在は 1 週間・・・私も元の勤め先、今は横田に移転して居ますが、あそこの在日米軍司令部にも寄りたいと思っています。・・・ご迷惑でしょうが、4 月 30 日から 5 月 7 日まで、それから 5 月 28 日から 30 日までお世話になりたいと思います。どうぞ宜しくお願いします。

Koshi 夫妻にとって、30 年ぶりの歌との再会であった。青山の歌の自宅近くのプレジデント・ホテルに滞在し、歌と父竹次郎の思い出を共有した。帰国後も日本滞在中に写した写真を歌へ送った。その写真では、旧交を温めた友人夫妻と団欒する歌の姿が写っている。父竹次郎の話は、歌を元気づけた。

父竹次郎の縁で、早稲田大学の後藤の知己を得たことは、歌に早稲田大学社会科学研究所への現金寄付へつながっていく。同研究所の活動を理解し、父竹次郎の早稲田大学への思いを代弁したものであろう。また、後藤に弁護士の紹介を依頼したのもこの頃である。後藤は早稲田大学での先輩の増田与教授に相談し、その先輩である原田策司弁護士<sup>36</sup>を歌に紹介した。歌は、弁護士に遺言証書の作成を依頼した。原田弁護士から、後藤への書面にそのことが記されていた。以下は、1986 年 12 月 25 日付の文面である。

・・・増田先生を通じてご紹介のありました、原口歌さんのご相談にのって居りましたが、原口さんのご依頼により遺言書の写しをお送り致します。原口さんの話では、遺言書も内容の補足については、後日お手紙を差し上げる由です・・・末筆ながら増田先生に宜しく。

文面にも書かれているように、歌は国立音楽大学を退職した翌年の 1986 年に最初の遺言証書を作成している<sup>37</sup>。当時の歌が、大学を離れ、生活の変化や体調の悪化から不安と孤独を感じていた時代に重なる。原田弁護士を信頼し、その後の遺言書き換えや、墓地の購入

---

<sup>36</sup> 原田策司弁護士も、早稲田大学の出身である。筆者は 2011 年 12 月 13 日に直接面談の機会をえて、原口歌についてお話を聞くことができた。歌の最晩年を最も良く知る方である。

<sup>37</sup> 歌は、遺言証書を 1989 年に書き換えている。

を含め、様々な相談をしたことも、原田弁護士から直接聞くことができた<sup>38</sup>。彼は、歌が最後まで信頼を寄せていた1人であった。

## 2) 最晩年

1987年2月に母・志げをが死去した。実母であり、竹次郎の死後は、母と青山の自宅で2人きりであった。母とは若いころから「距離があった」とはいえ、一人きりになった淋しさや不安は想像に難くない。この年は『原口竹次郎の生涯』が出版となった年でもある。母志げをの死は、竹次郎と先妻鶴子との結婚を想起させる。鶴子と志げをは全く異質の女性であった。その性格も生き方も対照的である。鶴子は近代的で革新的な新しい女性であり、コロンビア大学留学中に日本人として初の心理学の博士号を取得し、研究者としての業績を残した。彼女は、同時期に留学中であった竹次郎と結婚を決め、当時としては破格の行動力でアメリカの新聞紙上でも大きく取り上げられた。一方、鶴子より11歳年下の志げをであるが、見合い結婚後、夫竹次郎に従って植民地台湾へ渡り、夫だけを頼りに新生活をはじめている。彼女は、名古屋の女学校を出たばかりでいきなり2児の乳飲み子の母となり、外地で生まれた実子を加えて4人の娘と1人の息子を育てた。早稲田大学を去り、台湾で新たな人生を始めた竹次郎を支え、家族の団欒を守った女性である。新天地で夫竹次郎が求めたのは、旧来の日本的伝統的な女性で、志げをはその期待に応えた。志げをには、当時の良妻賢母の姿がある。しかし、若き日の竹次郎は先妻の鶴子<sup>39</sup>と、実験的・革新的な夫婦をめざし理想の夫婦像とした時代があった。鶴子について、荻野いずみは、「日露戦争後の、女子高等教育無用・有害論の高まった反動的な時代に、新しい学問、心理学を志して留学に踏み切り、水準に達する研究を為した彼女は、結婚生活においても夫と机を共有するような対等で新しい夫婦関係を築いている<sup>40</sup>」と述べている。鶴子は、自立した女性が男女の別なく、研究者として研鑽する夫婦を理想としていた<sup>41</sup>。その理想は、竹次郎も同じであった。しかし、現実には出産と育児、研究の両立は鶴子の体を蝕み、30歳の若さで急死した。鶴子は、明治末期の知識階級の青年の理想の女性である。女性もその高い教

---

<sup>38</sup> 原田策司弁護士とのインタビューは、2011年12月13日である。長時間にわたり、最晩年の原口歌の様子を聞くことができ、大変参考になった。歌の最後を知る数少ない証言者である。

<sup>39</sup> 鶴子については、『原口鶴子：女性心理学者の先駆』（荻野いずみ著、銀河書房、1983年）がある。

<sup>40</sup> 同上、17頁。

<sup>41</sup> 鶴子の葬儀の際に、内ヶ崎作三郎による説教があった。その中に、竹次郎と鶴子夫婦についての記述がある。「・・・原口君と夫人との家庭生活は余りに短かった。しかも其れは理想的なる愛の家庭であった。真心と純潔に充ちた生活であった。病床にあっても、夫人はこれに満足して居られた。原口君も亦夫人の事業のために、人に知られざる苦心をなし、多くの助力を与えられたのであります。私は此処に於いて彼の有名なキューリー夫妻を思わざるをえない・・・夫婦がその目的を1つにし、相協力して学界のために尽くさんとしたるが如きは、日本の社会には実に例の少ない事です（荻野、239頁）。「健全なる新婦人の先駆者：故原口鶴子葬式説教」『六合雑誌』第418号、1915年11月1日。



育と才能で、新しい生き方をすることが真の「女性解放」であることを竹次郎も理解していた。竹次郎の遺した鶴子への追悼文には、鶴子への尊敬と早死した妻への口惜しさに満ちている。竹次郎が鶴子の著書『天才と遺伝』の序で、妻・鶴子を追悼して次のように書いた。

鶴子は、学問に於いてのみならず、家事や社会上の問題に対しても、少なからず興味を持ってゐた。而して、新聞雑誌の記者が訪問する毎に、健康の許す限り、会って意見を述べた。此の方面に於ける彼の努力は、彼が学術的方面に向かつて注いだる勢力に比ぶれば、誠に微少なるものであるけれども、永眠する以前に、毎号執筆するよう依頼してきたものに、『新日本』『実業之日本』『婦人画報』がある……死ぬる前1両年、彼は品位ある、第一流の学者として、確実に地歩を占めてゐたのである。(略)

活発元気なる洋行以前の彼を知れる友人、先輩は、彼が制御し難き一個の婦人となって帰りはしないかと危ぶんだ。彼は帰朝後と雖も依然快活であつた。悠長であつた。元気であつた。併し、又非常に涙もろく温順になった。彼の一先輩は、彼が余りに柔和になったのを見て、大いに心配した位である。之には、彼が人の母となつたといふ事情が、大に与つて力あると思ふ。只、彼が生ひ立つ子供の行く末を見ずして死なねばならなくなつたのは、返す返すも遺憾である。彼は、大正4年9月26日の朝、30歳を一期として、永き眠りについた。<sup>42</sup>

歌にはこの鶴子について書いたものは残っていないが、父の学者時代をともに歩んだ女性として理解していたと思う。父竹次郎が娘歌に期待したのは、鶴子のような女性であつたかもしれない。また、情より知を好んだ歌は、そうした父の理想に応えた。一方、竹次郎とその後妻である志げをとが不仲であつたように、歌も母を理解することはなかった。歌には、常に上昇志向と誇りがあり、父の期待と栄光を体現する意志があつた。

しかし、定年退職し、自宅での生活がすべてとなると、実母の死は、歌の孤独と不安の一因となった。1992年に歌が同窓会誌に寄せた文では、病院以外に外出したことがない、と書いている。自身が病気がちであつたことは、レッスンに来る教え子も証言した。母の死で落ち込むことが多くなつた歌のことを心配した教え子の1人が、カトリックの信者であつたことから、「東京カリタスの家」に相談した。東京カリタスの家は、信者によるボランティアの活動団体で東京都の特殊財団法人として認可されている。同会は、カトリックの信仰に基づいて隣人の救済のために活動しているもので、求められる内容を精査した後、適切な援助を行っている。本部は東京文京区の東京カテドラル関口教会に置かれ、本部からの指示で麻布教会の信者が数名、歌の支援に来るようになった。歌は当時、臥せりがち

---

<sup>42</sup> 「原口鶴子」『天才と遺伝』序、234～5頁、1916年2月7日。

で、落ち込みが激しかった<sup>43</sup>。麻布教会の神父<sup>44</sup>や、訪問した信者の証言によると、その後、ボランティアの来訪を一方的に断ったようで、以後数年間、教会とは関係を絶つ時期があった。神父や信者によると、その後、再び自宅へ来てほしいとの連絡があり、受洗の気持ちを伝えてきたという。歌は、「葬式はカトリックで」と強く希望し、御聖体の拝領を求めたようである。しかし、神父や信者の訪問に対して、歌は心を開くことはなく、神父でさえ「周囲に気配りの出来ない人」と評される。ボランティアとして、世話をしてくれる人たちへの配慮に欠けていたことを、「家庭を持たなかった人だから」と批判されてしまう。信者の 1 人で、カリタスの家から歌のもとへ来るようになった前田千恵子によると、歌に付き添って大塚の癌研まで何度か出かけたが、当時の歌が首にできた腫瘍を癌の再発だと不安がっていたと証言する。病院に行っても「先生（医師）は信用できない」と不安を募らせた。不安はその後も強まり、1999 年 11 月に東京女子医科大学病院に入院した。2003 年 3 月に退院するが、その後は介護ヘルパーと看護師の訪問で、自宅での療養生活となった。

1997 年に早稲田大学の社会科学研究所が改組改名し、アジア太平洋研究センターとして改組され、翌春には大学院アジア太平洋研究科も創設された。この年から 2003 年まで、歌が後藤へ書き送った書簡が 6 通残る。その文面から、最晩年のほぼ 10 年間の歌の姿が理解できる。1997 年 2 月 4 日付の歌の手紙である。

立春となりました。暦の上では春でもまだまだ寒い日が続きます・・・77 歳の誕生日を覚えて下さり、美しい優雅な高価な花カトレアをお届けくださりまして本当にありがとうございました。花言葉がその姿の通り「高貴」で、頂いてはや 2 週間余りになりました。今尚、新鮮に咲き、涙が出るほど美しく咲いて居ります。毎朝少しずつ、水をやる毎に、これを贈って下さったやさしい贈り主のことを思い出します。どのようにお礼申し上げてよろしいやらわかりません。先生は、亡き父の恩人で、父を思う毎に先生を思い出します。その父も亡くなつてはや 46 年となります。私も亡父より長生きしてしまい申し訳なく思います。

歌のこの文章は、とても女性らしい。カトレアの花に感激し、父を懐かしむ姿は、年齢に関係なく、いつまでも「高貴に美しく」と願う歌の心情であり、花に水をやり、音楽聞

---

<sup>43</sup> 麻布教会の信者である前田千恵子から聞き取りをした（2011 年 11 月 18 日）。前田は、「当初は、数名で訪問し、簡単な調理や掃除、家の雑用をした」とか、歌とは、「あまり会話はなかった」と証言した。前田は、麻布教会を訪ねた際に偶然会うことができた人で、歌の受洗の際の太母を引き受けている。現在、90 歳になられ、歌とは年齢も近く「親身になってお世話をしたが、結局受け入れられなかった」と悔やまれている。麻布教会の信者として、病院から運ばれた遺体の世話や通夜、葬儀の準備、手配までこなした。葬儀に参列した数少ない人の 1 人でもある。貴重な証言であった。

<sup>44</sup> 麻布教会、藤井神父による(2011 年 11 月 18 日)。

いて過ごす日々であった。

1997 年 7 月 6 日付の後藤への手紙には、「時代に取り残されてゆくことがはっきりわかります」とインターネットやパソコンが普通になって行く時代を感じ、「近頃では孫のような生徒達を相手にレッスンをしたり、お手伝いさん相手に植木鉢の手入れをしたり、好きなグレン・グールドのレコードを聴いて毎日を過ごして居ります」と近況を書いている。以下は 1999 年 7 月 18 日付の歌の手紙である。

(略) 日々の流れは速くて驚かされます。私はそろそろ 80 歳に(来年 1 月)になります。年をとるとゆうことは、若い時代には思いも及ばなかったことで、たとえば入浴することも一人では出来なくなり、介助を受けるようになり、脱衣着衣も不自由となり、爪を切ることも自分ではできなくなり、老いをつくづくと感じるようになりました。港区から介護ヘルパー<sup>45</sup>が週 15 時間介護に来てくれるようになり、ようよう自立しています。生徒は張り切って元気に稽古に来ますので、私もそれに励まされて何とか続けています。しかし、友人、知人も次々に亡くなり、寂しくなってきました。自分の一生を振り返り、後悔することはなく、音楽一筋で貫き通したことを満足に思っております。

この手紙から、歌が介護ヘルパーを受け入れていること、何とか一人で「自立」していること、教え子へのレッスンを続けている生活の様子が伝わってくる。また、自分の人生をふりかえって、「音楽一筋であったことに満足している」と書いていて、その意志の強さが理解できる。

1999 年の 11 月 12 日の手紙では、後藤に「手術の必要があると医師に告げられた」と書き送った。手紙には、「去る 5 月頃より体調を崩し、病院通いをして居りました。複数の病気に悩まされて居り」とある。医師から腫瘍の摘出を宣告され、また不眠も改善されることはなく、この 11 月の入院は翌年の 3 月まで続いた。

2003 年 11 月 13 日付の後藤への手紙が最後となる。後藤が、「原口竹次郎論」を収めた『志に生きる』<sup>46</sup>を歌に送ったことへの礼状である。歌は、次のように感謝を伝えた。

一昨日は手紙と『志に生きる』の御本を頂きました。先生はお加減がお悪く、入院までされたよし、驚きました。私にとりましては先生がお元気で活躍されますことが何よりの生きがいです。幸い快復されましたよし、くれぐれもお大切になさってくださいませ。「志に生きる」に亡父のことをお書きくださいまして、先生のご芳志、心から感謝と感激で涙が止まりません。これから拝読させていただきます。10 数年前、先生が「原口竹次郎の生涯」を多大の困難をのりこえてお書き頂きましたご本は、

---

<sup>45</sup> 行政による公的な介護保険サービスの 1 つである。

<sup>46</sup> 江口敏、清流出版、2003 年。

今も絶えず手元に置き、読み返して居ります。先生が正に正確に亡父をご理解下さり、愛情をこめてお書き下さり、日の光にあててくださいますこと、重ねて厚くお礼申し上げます。ほんとうにありがとうございました。

歌は、後藤を通じて父竹次郎と「再会」した喜びをかみしめている。病床にある歌を支えたのは敬愛する父への思いであり、原口竹次郎を再び早稲田大学と復縁させた後藤への感謝の気持ちであった。

「人付き合いのへたな人」「選り好みの激しい人」と、歌を変人と表現する言葉を聞いていた筆者には、晩年の歌の手紙からはイメージできない。国立音楽大学の教授時代から、公私の区別をはっきりつけて、決してプライベートのことは表に出さなかった歌である。悩みや不安、落ち込みを音楽教育の現場に持ち込む人ではなく、精神的な自立を身上にした女性であった。最晩年の歌の自宅を訪ねてくるのは、麻布教会の神父と信者の人、2〜3名の教え子、介護ヘルパー、後見人<sup>47</sup>だけであった。しかし、最後まで信頼して心から頼ったのは、後藤教授と原田弁護士であった。原田弁護士には、度々電話をして遺言書の作成や変更の相談から、後見人の依頼<sup>48</sup>までした。

死去する数年前は、教え子も訪問を遠慮していた<sup>49</sup>。原田弁護士によると、2009年1月、近所に住む後見人（歌が自分で依頼していたが、先に亡くなってしまった）の夫人から、「在宅での介護は限界、長期入院できるところを探してほしい」と原田弁護士へ連絡が入った。歌は入院を強く拒否したが、結局、原田弁護士は、医師とともに歌を説得して東京女子医科大学病院へ入院させた。入院中も退院したいと何度も原田へ訴えたようである。しかし、医師は「退院しても在宅では無理」と判断であったため、長期療養ができる新宿石川病院へ転院した。8月9日に、この病院から死亡が原田弁護士に伝えられる。遺言の執行者として、最後の歌をみとったのは、原田であった。

通夜、葬儀は麻布教会で行われた。歌が「葬儀はカトリックで」との最後の希望はかなえられた。原口歌は、東京カテドラル大聖堂の納骨堂にひっそりと埋葬されている<sup>50</sup>。最後の教え子たちへ連絡したのも原田弁護士である。歌と最後まで寄り添っていたのが彼であ

---

<sup>47</sup> 歌は生前、青山の自宅近所に住む、角田氏を後見に頼んでいた。原田弁護士によると、歌は成人後見人の制度について知りたいと相談をし、2005年11月に正式に角田を後見人にしている。

<sup>48</sup> 原田弁護士によると、既に後見人であった角田が歌よりも早く死去したため、歌は原田弁護士に次の後見人を依頼したかったようである。

<sup>49</sup> 吉浦によると、最後に歌と話したのは、死亡の連絡があった2年前で、その時も、電話だけであった、との証言である。吉浦は歌の遺言により、ピアノ一台と楽譜を遺贈されている。

<sup>50</sup> 遺言書には、雑司ヶ谷霊園の父のそばで眠りたいと書かれたが、歌自身が生前、東京カテドラル教会の納骨堂を購入していた。雑司ヶ谷霊園に問い合わせたが、個人情報で原口家の墓についてお話できない、との返事であった。原口家の墓の現在の名義人（使用者）かについて不明である。

り、歌の信頼を得ていた方であった。歌の遺した遺言により、その資産のほとんどが早稲田大学へ遺贈された。